

# 西鶴『一目玉鉾』における下関の地名について

倉 本 昭

## 要 旨

井原西鶴編の絵入り道中記『一目玉鉾』の研究は十分進んでいないが、彼が参照した文献は先学によって明らかにされている。その成果を生かし、『一目玉鉾』中の下関に関わる記事について考察した。西鶴は『西海陸細見図』『諸国案内旅雀』『名所方角抄』『類字名所和歌集』など先学指摘の文献を用いて下関の記事を綴る。しかし、それらに見えない地名は「海瀬舟行図」に発見されることがわかった。これを西鶴は直接見ずに、そこに記録された地名を西海航路に通じた人間から得た可能性が高い。また聞きなれない下関の地名や名物に関わる誤伝も、伝聞によって得たと推定できる。以上からすれば、彼が直接下関を訪れた経験を生かして書いた記事とは考え難い。

キーワード：井原西鶴『一目玉鉾』『西海陸細見図』『海瀬舟行図』

## はじめに

井原西鶴が編集した絵入り道中記『一目玉鉾』については、真山青果の研究成果が『真山青果全集』第十六卷（昭和51年 講談社）で見られるし、その意義は、第二期近世文学資料類従西鶴編22『一目玉鉾他』（昭和50 勉誠社）に前田金五郎が寄せた「真山青果氏の『一目玉鉾』研究資料」に説かれている。以後、『玉鉾』に触れた研究は決して多くないが、市川光彦がまとめた研究を積み重ね、『井原西鶴研究』（平成4 右文書院）に収めた。市川の研究以降、『玉鉾』論に大きな進展はないが、平成後半に成った森田雅也による「西鶴『一目玉鉾』と「海の道」」<sup>(注1)</sup>が、新たな視点をもたらして興味深い。

筆者は長らく『一目玉鉾』の下関の記事に、何か不自然なものを感じてきた。誤った地名、聞きなれない地名が載っているからである。従来、西鶴は九州に旅したとされ、下関市内には西鶴が来関したという説明板もあるのに、なぜか。

この疑問を説く先人の論考はない。そこで、『一目玉鉾』の下関の記事に焦点を当て、地名の杜撰にまつわる問題について考察する。具体的には、先人の研究成果に導かれ、西鶴が下関の地誌情報をどれだけ文献から得られたかを検討し、その過程で誤った地名や未詳の地名が扱ってき

たるところを探る。文献に拠ったとしたい部分があれば、西鶴の情報源が那邊にあったかを考える。そのなかで西鶴の旅についても検討するヒントが見いだせるであろう。

## 一 『一目玉鉾』下関関連記事

まずは『一目玉鉾』巻四から、下関に関わる部分の記事を翻刻する。テキストは影印本<sup>(注2)</sup>を利用した。翻字は全て現在通用の字体に代え、読みやすいように濁点、句読点を振った。よみがなは翻刻文中に（ ）付で示す。なお、後考で取り上げる便宜上、筆者が翻刻文中に①以下の数字を加えた。

① ○干珠嶋

② ○満珠嶋

此ふたつの嶋は神軍の時海中になげさせ給ひ汐の満干（みちひ）のありける所也。沖のかたにまんじゆ嶋、汀にちかきは干珠嶋也。（以上影印本底本では14丁表）

〈中略。以下豊後豊前の記事が挿入され、最後に彦山の記事があって長州記事に続く。以下は影印本底本に錯簡があるが、翻字では本来あるべき順に直した〉

是より北の海辺長門の内

③ ○長府（ちやうふ）の城主毛利甲斐守殿

④ ○八幡宮 ⑤ ○あみだ石 ⑥ ○浜の八幡

⑦ ○門司（もじが）関 ⑧ ○赤間（あかま）が関とも

⑨ 旅人の心つくしの道なれや往来ゆるさぬ門司の関守

⑩ 書絶てへだつる中と成にけり見し玉づさのもじのせき守

⑪ 硯切まへの細道ほのくれて薄く書なすもじの玉づさ

此所硯石の名物也

此関今の下の関なり。舟がかりのよき大湊也。遊女ある所をばいなり町といへり。

⑫ ○阿弥陀（あみだ）寺 清盛（きよもり）の御影あり。此外平家の一門残らず有。

⑬ ○鷲の松

左中将清経詠めしと也（以上影印本底本では再出16丁裏）

⑭ ○竹嶋村 ⑮ ○干珠嶋

⑯ ○ひしま ⑰ ○びく嶋

⑱ ○小通り嶋 ⑲ ○今浦

⑳ ○いかき ㉑ ○沖のもつれ

㉒ ○地のもつれ ㉓ ○ひんぢの鼻

⑭ ○間の嶋

⑮ ○小友

⑯ ○西間の嶋

是は長門の国の分（以上影印本底本では15丁表）

## 二 引用和歌の出典

先の抜粋記事中にある古歌のうち⑨と⑩は『名所方角抄』「赤間関」の項に見出せる。②の説明の後半は本書の「沖なる満珠なり。奥津也。汀ちかき干珠也。平津也」に拠る。

『方角抄』には⑩の歌のあとに「まへの細道は前田といふ所か。門司の関に硯きる石有之」と見える。<sup>(注3)</sup> 西鶴は本文中にはとりあげないが絵図に「ほそ道」と表示する。絵図と実際の地理を照応させるに、「ほそ道」は前田ではなく、赤間関街道北浦筋であるところの奥小路にあたるかとも考えられるが、存疑としておく。

⑩は『方角抄』には見えないから『類字名所和歌集』から採ったと思われる。「門司関 豊前」のところに『新続古今集』恋四から「かき絶て隔る中となりにけりみし玉章のもじの関守」を引き、すぐ後に⑨を挙げている。

⑩の歌は『松葉名所和歌集』「門司関」の項にも見えるが、『新葉和歌集』から引いて第二句「通はぬ中」とあるから、西鶴は拠っていない。

次に、島名由来の伝説については『方角抄』に加え、『本朝神社考』も踏まえた可能性がある。前者には「干満の二珠を被納云々。みちひの嶋と申也」としかないからである。対して『神社考』には以下の如く、二珠縁起が詳しく説かれている。

皇后、磯良に勅して干珠満珠（しほひるたましほみつたま）を龍宮に乞ふ。龍宮乃ち兩珠を獻る。皇后、是に於て黄石公一卷の書龍神兩顆の珠を以て、三韓に発向し玉ふ。（中略）時に皇后、干珠を投げ玉ふに潮退いて陸と為り、三韓の士卒、舟より下つて相戦ふ、皇后又、満珠を投げ玉ふ、潮忽ちに来る。溺死するもの数を知らず、三韓王、我が神兵の拒ぐ可からざるを見て、遂に降つて罪を乞ふ。<sup>(注4)</sup>

しかしながら、ここに挙げた文献を西鶴が参考したことは、つとに先学が指摘していることであり、下関の記事についても同じ事が確認できたまでで、何ら新鮮味はあるまい。<sup>(注5)</sup>

## 三 『西海陸細見図』の影響について

次に西鶴が下関の地名・名所を列挙するのに拠りどころとした文献を検討する。既に『一目玉鉾』への影響が指摘されている『名所方角抄』にせよ『歌枕名寄』にせよ、和歌にゆかりある地

名を挙げるばかりである。編者舟也が西鶴と交渉のあった『日本鹿子』<sup>(注6)</sup>を見ても『玉鉾』ほど細かい地名を掲げることはない。

そうなると西鶴が扱ったのは道中絵図だと考えざるをえない。寛文十二年の刊記をもつ『西海陸細見図』からの影響については、やはり滝田貞治が早くに指摘し、市川光彦の諸論考で更に詳しく検討がなされた。同絵図から下関の地名を拾うに、先に番号を付した地名の多くが発見できる。それを先の『一目玉鉾』翻刻に付けたナンバーと対応させて、以下の表にまとめてみた。なお『細見図』テキストは山本光正の論著に掲載する国立公文書館内閣文庫蔵本影印を利用する。<sup>(注7)</sup>

西海陸細見図	一目玉鉾	現在の地名
a 長府	③ 長府	長府
b かんしゆ	① 干珠嶋	干珠島
c まんしゆ	② 満珠嶋	満珠島
d そわへ	ナシ	未詳
e あみた石	⑤ あみだ石	阿弥陀寺(あみだいじ) 町名
f 八まん	⑥ 浜の八幡	亀山八幡宮
g 下せき	⑪ 下の関	下関
h たけ嶋村	⑭ 竹嶋村	竹崎
i たけ嶋	⑭ ニ準ズルカ	伊崎
j かんじゆ	⑮ 干珠嶋	巖流島
k ひし嶋	⑯ ひしま (⑰ びく嶋)	彦島
l をきのもと	⑳ 沖のもつれ	六連島
m 地のもろと	㉑ 地のもつれ	馬島
n ひんしのはな	㉒ ひんぢの鼻	毘沙ノ鼻
o あいの嶋	㉔ 間の嶋	藍島

表を見るに、『西海陸細見図』で記される地名と『一目玉鉾』に見える地名とで表記が異なるが、この程度では大きな問題にはなるまい。<sup>(注8)</sup>

西鶴が下関の地名を拾うにあたり、『西海陸細見図』や、その系統の写本を参照したことは確かである。それはe「あみた石」を採っているからである。「あみた石」とは正しくは「阿弥陀寺」のことである。町名「あみだいじちょう」が今に至るまで残っているように、地元では「あみだいじ」と呼ばれていた。あろうことか、それを「あみだいし」として、『細見図』制作者はモニュメンタルな石と勘違いしてしまったのだ。下関のことを知らない者が『細見図』を見たら、堂宇が「あみだ石」という大岩の上に建つのか、堂宇が聳える山の一部に、さような名の岩があるのだと思い込んでもおかしくはない。

この誤解は『細見図』系写本の絵図に受け継がれていく。早稲田大学図書館蔵「江戸長崎道中図巻」では、堂宇が建つ海辺の小山の脇に、もう一つ樹木の生えた小山が描かれ、二つの山が重

なる部分の下一海上—に「あみた石」と記す。これを見たら小山のいずれかを「あみだ石」と受け取ってしまう。また、立正大学田中啓爾文庫に蔵される卷子「江戸より長崎まで名所旧跡道中図」には、早大の「図巻」に描かれた二つの小山—ただ田中文庫の絵図では海辺の大岩に見える—の左方、方角でいうと西に、距離をおいて、わざわざ第三の大岩を描き足し、そこに「あみた石」と記すのである。<sup>(注9)</sup>

『細見図』とは系統を異にする「海瀬舟行図」（神戸市立図書館本）には、正しく堂宇の上方に「阿弥陀寺」とあるし、九州大学図書館蔵「江戸ヨリ長崎迄」なる絵図<sup>(注10)</sup>も同様である。

西鶴は『細見図』あるいは『細見図』系写本の絵図から「あみた石」を採り、それとは別に⑫阿弥陀寺の名称も並べているから、「あみだ石」が『細見図』制作者の誤解からうまれた、あるいはもしない名所であることには気づいていない。

しかも、阿弥陀寺の説明にも誤りがある。「清盛の御影あり。此外平家の一門残らず有」とあるのは、『諸国案内旅雀』に「あみだ寺と云寺有、則こゝに安徳天皇平氏一類の御影有」と見えるのを、安徳帝と清盛を取り違えて書いたのである。<sup>(注11)</sup>

取り違えたきっかけは、今川了俊『道行きぶり』に「安徳帝の御尊影をはします。本尊は、清盛公の福原の持仏堂の阿弥陀仏と申なり」<sup>(注12)</sup>とあるのにひかれたからか。

さて、あらためて表を確認すると、西鶴が下関の地名を拾う際に参照した資料として『細見図』だけを指摘するのでは足りないことがわかる。

たとえば、l「をきのもと」、m「地のもろと」という『細見図』の誤りを、西鶴が「沖のもつれ」「地のもつれ」と正しているのは、何によってか。

また、『一目玉鉦』の④⑦⑧⑫⑬⑱⑲⑳㉑㉒の地名は、『西海陸細見図』では確認できない。⑦⑧は『方角抄』に詳しく説かれ、⑫は『諸国案内旅雀』に見えるから除くとして<sup>(注13)</sup>、残り七つの地名は、どこから採ったのだろうか。

k「ひし嶋」と『細見図』にはあるのに、西鶴は⑯「ひしま」⑰「びく嶋」と二つの島名をあげる。二島の名は、どこから情報を得たのか。<sup>(注8・14)</sup>

⑥の「浜の八幡」にしても、『細見図』には単に「八まん」とあるばかり。かような呼び方を西鶴はどうやって知ったのか。

#### 四 その他の道中絵図・海路図との関り

山本光正の論著に、「西海道船路図」なる絵図（卷子装）が影印で紹介される。解説によると版本でありながら無刊記、題簽もないようだ。「西海道船路図」とは山本本の箱書にある題である。大英図書館本・下巻表紙には「□国海陸安□絵図 京都より諸国迄」と見える刷題簽が確認できるよし。

国会図書館蔵「江戸長崎間道中絵図」は、この「西海道船路図」の一本であるが、やはり刊記はなく、刷題簽もなし。全編に手彩色がほどこされている。

当「西海道船路図」は先に検討した『西海陸細見図』と似る点が多く、小山に「あみた石」の文字が見える<sup>(注15)</sup>。しかし、長府に天守閣や角櫓のある縄張を描きこんだりして、『細見図』とは全く異なる図柄であることに注意したい。

以下の表は二つの絵図と『一目玉鉾』に見える地名の比較対照を行ったものである。

西海陸細見図	西海道船路図	一目玉鉾
a 長府	長府	③ 長府
b かんしゆ	かんぢ	① 干珠嶋
c まんしゆ	まんぢ	② 満珠嶋
d そわへ	そはへ	ナシ
e あみた石	あみた石	⑤ あみだ石
f 八まん	八まん	⑥ 浜の八幡
g 下せき	下ノ関	⑪ 下の関
h たけ嶋村	ナシ	⑭ 竹嶋村
i たけ嶋	竹嶋(※島嶼)	ナシ
j かんじゆ	かんしゆ嶋	⑮ 干珠嶋
k ひし嶋	ひしま	⑯ ひしま(⑰びく嶋)
l をきのもと	仲のもつれ※	⑳ 沖のもつれ
m 地のもろと	地のもつれ	㉑ 地のもつれ
n ひんしのはな	ひんしのはな	㉒ ひんぢの鼻
o あいの嶋	あいノ嶋	㉓ 間の嶋

※島嶼「船路図」は竹嶋を「ひしま」の北に位置する島とする。後に竹の子島と呼ばれる島である。

※「仲のもつれ」と「船路図」にあるのは、仲の字と沖の字の偏のくずしが紛らわしいので「船路図」が誤ったもの。

⑯⑰⑱は「船路図」が参考になりそうだが、当絵図の刊年がわからないので影響について論じがたい。大英図書館本は、『玉鉾』刊行翌年の秋に来日したケンペルが、その二年後、離日するまでに入手し、欧州にもたらしたものだというのが、『玉鉾』編纂時に刊行済みの絵図であったとは断言できない。また⑭の地名が「船路図」にはないことも気になる。

## 五 「海瀬舟行図」他との関係

『一目玉鉾』影印本に付載された『西海路之づ』は、延宝五年丁巳年六月の刊記をもつ。これで下関のあたりを見ると、「ひくしま」の表記が発見される。『玉鉾』が「いかき」と誤る伊崎は正しく「伊さき」とある。⑱「小通り嶋」が「小通り」として見えるのにも注意されるが、これ

は島ではなく、島と島間の瀬戸を指すにすぎない。西鶴が扱った『諸国案内旅雀』に「小通と云せと」とある通りである<sup>(注16)</sup>。

一方『西海陸細見図』で「あいの嶋」とあったのを、西鶴は「間の嶋」としたが、『西海路之づ』では「相の嶋」の表記である。『西海路之づ』には「こもつれ」はあるが、もう一つの「もつれ—大もつれ・地のもつれ—は描かれない。

『西海陸細見図』や同系統の絵図類が、島嶼でもないのに「竹嶋」と誤るところを、『西海路之づ』は正しく「竹崎」(岬にある地名)とするのに『玉鉾』は採らない。

加えて、長府に「小野城」と記し、阿弥陀寺も亀山八幡宮も示されない『西海路之づ』を、『一目玉鉾』の下関記事と深く関係づけるには躊躇せざるをえない。

『西海路之づ』より注目したいのは、「海瀬舟行図」である。これは寛文七年、幕府から中四国地方九州地方沿岸の調査を命じられた浦々巡検使・衣斐玄水が、延宝八年に作成したもので、国立公文書館内閣文庫に中国・九州地方を含む下巻一帖が残るほか、神戸市立中央図書館本がとくに知られ、インターネット公開もされている。京都大学文学部地理研本、岡山大学附属図書館本、高知城歴史博物館本や、享保四年に写された愛媛県歴史文化博物館本など各地に伝本がある。

いま神戸市立図書館本を検するに<sup>(注17)</sup>、『玉鉾』にある⑱「小通り嶋」が「小通嶋」として絵図上に見え、⑲「今浦」の地名も「竹サキ」「伊サキ」の間にあるし、㉕「小友」も「アイ嶋」の東に記載される。今浦、小友は、これまで触れた絵図には一切見えなかった。『西海路之づ』とおなじく「ヒク嶋」も見える。

この「ヒク嶋」の南に突き出た部分のすぐに西側に「小シマ」という、ごく小さな島が描かれている(京大本にはなし)。これぞ『好色一代男』巻三の二「袖の海の肴売」に「内裏、小嶋より出る。たゝ・じやう」(テキスト『好色一代男全注釈』上 角川書店)とあるうちの「小嶋」であろう。対岸「柳カ浦」(ここに内裏がある)はすぐで、そちらに渡り、門司往還を西行すれば小倉である。ただし漁家が何軒もありそうな島ではない。「ヒク嶋」をはさんで東側にある「ガンリウ」(いわずとしれた巖流島決斗の舞台)・「舟シマ」より更に小さく描かれているからである。

このように注目すべき「海瀬舟行図」であるが、これを西鶴が直接参照できたとは思えない。参照しておれば、「あみだ石」は存在せず、「阿弥陀寺」が正しいことが一目瞭然である。『玉鉾』が誤る⑭「竹嶋」⑳「いかき」も「竹サキ」「伊サキ」と正しく記載されている。また『玉鉾』がいう㉕「干珠嶋」は、『細見図』で「ひし嶋」の東にある「かんじゆ」であるけれど、これは「舟行図」で「ガンリウ」と正せた。

しかし「舟行図」を見なくとも、そこに記載された玄海灘・関門海峡の地名情報は、色々な形で収集できよう。現地の地理、地誌に通じた人間から情報もたらされたかと考えるべきではないだろうか。



## 六 鷺の松と二つの八幡

④八幡宮、⑬鷺の松に触れよう。

⑬は薄墨の松が正しい。西鶴が『一目玉鉾』編纂に参照したとされる『諸国案内旅雀』には、先ほど引用した阿弥陀寺の記事の続きに「うす墨の松と云有。ここはむかふのものをかくすと云義也」とある。『玉鉾』に清経が歌を「詠めし」（詠は眺の誤刻か）とあるが、これは足利尊氏が正しい。<sup>(注18)</sup>

この誤伝は、謡曲『清経』からくるものであろう。

かかりけるところに、長門の国へも、敵向かふと聞きしかば、また舟に取り乗りて、いづくともなく押し出だす……柳が浦の秋風の、追ひ手顔なる後の波、白鷺の群れ居る松見れば、源氏の旗を靡かす、多勢かと肝を消す。<sup>(注19)</sup>

この引用に出る柳が浦は門司区大里の沿岸の古名だという説がある。現在のJR門司駅近くの柳町に、かつて観音堂があり、そこに清経の墓とされるものがあつた<sup>(注20)</sup>。柳が浦から船を関門海峡に漕ぎ出せば、対岸に阿弥陀寺がよく見える。そこで、寺域に生える松を、謡曲で清経の見た、鷺が群れる松に付会したのである。

ところが、さような名の松は、中世の紀行や、『玉鉾』に影響を与えたとされる絵図・道中記・名所和歌集には見つからない。寺では『旅雀』にあつた通り薄墨の松としていたはずである。誤伝とは知らず、謡曲好きの西鶴が聞いて関心をもち、『玉鉾』に記したのではないか。

さて④は⑥「浜の八幡」との対照で考えたら、阿弥陀寺と境内が地続きである鎮守八幡のこととわかる。『玉鉾』の絵図では「あみだ石」の右側の「八まん宮」とあるのが、これにあたる。対して、石の左側の「八まん」が亀山八幡宮である。

『西海陸細見図』以下、本稿で取り上げた道中絵図で、岬に鎮座して「八幡」とあるのは例外なく亀山八幡宮である。

『名所方角抄』には「亀山といふに八幡宮有之、地景無双の眺望なり」と見える。今川了俊『道行きぶり』には「家と並びて岡のやうなる山あり。亀山とて男山の御神のたたせ給ひたり」<sup>(注12)</sup>とある。

唯一、宗祇『筑紫道記』には鎮守八幡が取り上げられる。引用中下線は筆者。

此地の宿は阿弥陀寺といへり。(中略)鎮守の杜の作りざま細やかに、然も風景を想へるにや、門司の松山ぞ向に見えて、前に海水をながむ。次に安徳天皇の御影堂を見侍れば(中略)暮かかる程に亀山の八幡へ詣づ。<sup>(注21)</sup>



しかし西鶴は、宗祇の紀行文に教えられ、鎮守八幡を「浜の八幡」とは別に「八まん宮」として記載したのではなく、「八まん宮」に対して、「浜の」を付けて区別すべき別社があることを情報としてキャッチしたのだと思われる。<sup>(注22)</sup>

## 七 浜の八幡とは

筆者は既に「浜の八幡」を亀山八幡宮だとした。亀山は、かつて陸とは離れた小島であった。島の北側が埋め立てられた結果、外浜町・中之町・赤間町の浜が一続きになった。その長い海岸線を俗に八丁浜と呼んだ。<sup>(注23)</sup>つまり、浜とは、第一に八丁浜のことである。

亀山八幡宮の古写真<sup>(注24)</sup>を見ると、石の鳥居（昭和八年に成る現在の大鳥居の先代のもの）の前に、玉垣で囲われた踊り場があり、その先に石段をしつらえてある。それを十一段下ると海面である。この石段下は、江戸時代の資料によると「鳥居の浜」と出ている<sup>(注25)</sup>。「浜の八幡」とは「鳥居の浜に臨む八幡」の謂でもある。

眼下に山陽道と、軒を連ねる町屋とを見下ろす、紅石山麓の鎮守八幡に対して、海浜に近い亀山八幡宮を「浜の八幡」と称したのであろう。

かかる呼び分けの背景に、両宮の間で起きた権威づけをめぐる確執を読むべきかもしれない。天文十三（1544）年四月の「神道長上吉田家裁許状」の読み下しを見よう<sup>(注26)</sup>。

阿弥陀寺八幡宮は亀山八幡宮の末社にあらず。両社たるの段、証文一見し訖んぬ。次で神幸の次第、両社混乱の段、未曾有なり。去々年既に先証を以て裁判の上は、永く相違あるべからず。今度両社ともに以て同心をなす

ところが、その十八年後の永禄五年、五月二十五日付で正親町天皇綸旨が下っている。鎮守八幡の住職と亀山八幡宮大宮司との間で、神幸の際、住職が乗輿で供奉することについて激しい応酬があったらしい。裁定は朝廷にもちこまれ、結果、住持は出家者であり、世俗の規範から自由ゆえ、乗輿しても別儀なしとの勅裁が下ったのである<sup>(注27)</sup>。ここにいう神幸とは、五月晦日の夏越の祭礼（鎮守八幡では鎮守祭とも）において、鎮守八幡から亀山宮に神霊がお渡りすることである。<sup>(注28)</sup>

かかる対立史をふまえたら、鎮守八幡を「八幡宮」とする一方で、亀山八幡宮を「浜の八幡」と呼ぶのは、鎮守八幡側の矜持のあらわれなのかもしれない。

それはともかく、「浜の八幡」なる呼称は諸々の文献を閲しても見当たらない。本稿でとりあげた絵図にももちろん、それ以外では、萩藩絵図方の地理図師・有馬喜惣太が描く「御国廻御行程記」（完成は明和元年頃と考えられている）に、鎮守八幡こそ「八幡」とあるが、片方は正し

く「亀山八幡」とある。東京国立博物館研究情報アーカイブズに古地図データベース閲覧サービスがあるが、それで江戸期写とある「長州赤間関之図」を見ても「鎮守八幡」「亀山八幡」である<sup>(注29)</sup>。

西鶴は下関の一部で使われたか、西海航路の舟人たちが呼び分けたかとおぼしい呼称を聞いて、『一目玉鉾』に載せたのだと思われる。

## 八 まとめ 西鶴が得た情報源

最後に㊸西間の嶋に触れる。本稿でとりあげた絵図に西間の嶋はない。現在の地図で、藍島の西に男島・女島から成る白島があるが、この群島を西間の嶋とは呼ぶまい。西間の嶋とは、筑前国の相島と考える。こちらを「あいのしま」と読んで、西にある、もう一つの「あいのしま」としたわけである。<sup>(注30)</sup>

筑前相島では、江戸時代、福岡藩が朝鮮通信使を接遇した。回答兼刷還使も含め、十二回にわたり朝鮮から使節が来日、うち十一回相島に寄港、客館に滞在している。両羽家を頭とする漁家集団が生業をたてた藍島とはイメージが異なる<sup>(注31)</sup>。そんな筑前相島を「にしあいのしま」と呼ぶのは、『一目玉鉾』にある「間の嶋」＝藍島を管理する小倉藩や、東隣の長州藩側からであろう。しかも、西海航路に通じた人々らしく思われる。

一方の西鶴は『玉鉾』筑前国の記事で相島を「あの嶋」としている。これは『西海陸細見図』に拠ったもの。そして、彼は「あいのしま」に対して「にしあいのしま」があると情報を聞き、長門国の条に載せた。実は「あの嶋」と同じとは知らぬまま。

以上述べたことから、西鶴は机上で下関の記事の大半を構築できたといえる。その過程で、『細見図』を鵜呑みに「あみだいし」なる、ありもしない名所を掲載した。下関に干珠嶋が重複することも疑問に感じていないのは、やはり『細見図』を信じたからだ。『玉鉾』所載下関記事の杜撰はかような事情から生じた。

しかし、西鶴は文献以外にも情報源を得ている。九州の俳人で関係のあった筑前の西海・西波、筑後の西与、豊後の西国らが九州地方の情報源として従来取り沙汰されるが、西海航路に通じた人々―北前船などの海運に関わる者たち―も想定してよい。後者なら「海瀬舟行図」に載る地名を西鶴に教示できよう。「はまの八幡」「西間の嶋」という文献に見出しがたい呼び方や「鷺の松」という誤伝は、彼らによってもたらされた可能性がある。「いかき」「びく嶋」も誤刻ではなく、聞き違えただけでも考えられる。

このように総括すると、筆者には、西鶴が下関を実際訪れた経験や知識を『玉鉾』の記事に反映したとは考えがたい。下関を訪れずして、九州まで足を延ばしたかについても、今後検討の余

地があろう。

(倉本 昭 本学文学部教員)

- 注1 [http://saikaku48.jp/thesis/x2015\\_0001.pdf](http://saikaku48.jp/thesis/x2015_0001.pdf)で公開。『島国文化と異文化遭遇：海洋世界が育んだ孤立と共生』第1節「西鶴『一目玉鉾』と「海の道」—島国文化としての視点から」〈平成27年 関西学院大学出版会〉
- 注2 第二期近世文学資料類従 西鶴編 22『一目玉鉾他』(昭和50 勉誠社) 181・186頁。
- 注3 [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko20/bunko20\\_00169/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko20/bunko20_00169/index.html)  
赤間硯の原石を前田の紅谷なる地から採掘していた事実はあるが、阿弥陀寺後背の紅石山にも硯石を産したと伝える。『玉鉾』は関の解説で硯石に触れるから、関に近い後者を念頭においたと考えたくなるが、『玉鉾』絵図は赤間関と阿弥陀寺の位置関係からして実際の地理とは異なる。絵図の地名を下関の地理と重ねることは躊躇される。
- 注4 漢字の字体は現行のものに直す。テキストは改造社出版の文庫版(宮地直一校訂 昭和17) 97頁
- 注5 滝田貞治『「一目玉鉾」の撰述』〈『西鶴雑俎』昭和12 巖松堂〉、市川光彦『井原西鶴研究』第一章『「一目玉鉾」論考—その成立と性格に関して—』〈右文書院 平成4〉
- 注6 市川光彦『井原西鶴研究』第一章『「一目玉鉾」論考—その成立と性格に関して—』83～89頁などに、『一目玉鉾』と先書との関係、舟也と西鶴の関係について詳述される。
- 注7 本絵図については詳しい論著がある。山本光正による『街道絵図の成立と展開』〈臨川書店 平成18〉である。山本著には版本のうち国立公文書館内閣文庫蔵本の影印を納めており、そこに見える題簽・内題から、資料の称を『西海陸細見図』としている。本資料について、山本著に従い以下に少し詳しくまとめておかねばなるまい。元々、この資料は折本四帖から成るもので、前の二帖は内閣文庫本では『東海道細見図』とあり、続く二帖の題が『西海陸細見図』なのである。ただし、内閣文庫本は折本を卷子に仕立てている。しかも無刊記、後刷本であることが判明している。一方、国会図書館本は「寛文拾二壬子歳晩春吉旦 洛下二条寺町 西田勝兵衛開板」の刊記を有するが、折本四帖を、やはり卷子二巻に仕立て直してある。書題簽に「東西海陸之図 嶋山名所 上(下)」とある。この国会図書館本とは異なり、「寛文拾二壬子孟春穀旦」の刊記を有する東洋文庫岩崎文庫本は、折本のままの状態であるが、整理書名が『東海西海両道細見図』とされている。本論考では山本論著に従い、本資料の題を『西海陸細見図』とした。
- 注8 kひき嶋は「ひく嶋」と読みたいところであるが、「ひんしのはな」の「し」と同字体である。また、早稲田大学図書館蔵「江戸長崎道中図巻」の「日嶋」([https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru11/ru11\\_01160/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru11/ru11_01160/index.html))や九州大学附属図書館蔵「江戸ヨリ長崎迄(繪巻物)」の「ひ嶋」(九大コレクションでインターネット公開)など、『一目玉鉾』以外にも「ひしま」が見つかる。これらは「ひし嶋」の転訛とも考えられる。
- d「そわへ」は『西海陸細見図』系写本の絵図類の多くに見られるが、異なる系統の街道・海路図や下関の郷土誌類には見出せない。「海瀬舟行図」では、神戸市立中央図図書館本(<https://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/library/arc/items/025.html>)、京都大学本(京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開)ともに、「前田」の地名が見つかる。
- 注9 [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru11/ru11\\_01160/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru11/ru11_01160/index.html)

- <https://www.ris.ac.jp/library/kichou/lime/h032.html>
- 注 10 ウェブ上で閲覧できる「九大コレクション」公開版では、元禄四、五年頃の藩主名が見えるよし解説がある。
- 注 11 [https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i13/i13\\_00563/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i13/i13_00563/index.html)
- 注 12 稲田利徳「今川了俊「道行きぶり」注釈（五）」『岡山大学教育学研究集録』九三〈平成5〉12頁
- 注 13 いずれも市川論文で『一目玉鉾』との関係が指摘されている。『日本鹿子』は『玉鉾』より出版こそ遅れるが、市川による両者の内容比較から、前者が西鶴に与えた影響は疑う余地ない。
- 注 14 びく嶋はひく嶋に誤って濁点をつけたまで。
- 注 15 注8に書いた「そはへ」の地名もある
- 注 16 早稲田大学図書館蔵本  
(参 [https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i13/i13\\_00563/i13\\_00563.html](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i13/i13_00563/i13_00563.html))  
『旅雀』には「いさき」「大もつれ」「小もつれ」の地名も見える
- 注 17 神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズ  
<https://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/library/arc/viewers/025.html>
- 注 18 『防長寺社由来』第七卷（山口県文書館 昭和61年）長府領赤間関に、元文四年正月に藩宛て提出された「赤間関阿弥陀寺来由覚」なる文書がある（382頁）。そこに「一 当寺客殿前松木拾四本有之候。類焼の節七本焼失仕候。右の松薄墨の松と号候。見渡豊前地ニ文字と申所有之。尤人家も御座候。尊氏御詠歌 何れより名をあらわさん薄墨の松漏月の文字の夕暮 依之御歌、薄墨の松と唱来候事」
- 注 19 岩波日本古典文学大系『謡曲集 上』255頁
- 注 20 『門司郷土叢書』第14冊所載「門司の伝説」
- 注 21 岩波書店 新日本古典文学大系『中世日記紀行集』
- 注 22 「海瀬舟行図」神戸市立中央図書館本を見ると「串崎」の地に「八幡」とあって朱塗の本殿と鳥居が描かれる（京大本には八幡の文字なし）。これは『道行きぶり』に「串崎といひて若宮のたたせ給ひたる所なり」とある神社だ。応神帝一座を祀っていたところへ、毛利秀元が慶長年間に安芸宮崎八幡宮を勧請し、八幡二座となる。『玉鉾』の「八幡宮」とは、ここを指すのかもととれる。しかし西鶴は本絵図を見ていないと筆者は考える。それに亀山と伍す「八幡宮」たる由緒は鎮守八幡にこそある。それに『玉鉾』の下関絵図は『西海陸細見図』の影響下にあり、『細見図』においては殿舎が建つ小山をあみた石とする。その殿舎を『玉鉾』は「八幡宮」として「あみた石」と区別する。あみた石が阿弥陀寺だから八幡宮は鎮守八幡となる。
- 注 23 『復刻 郷土物語 関の町誌 上』35-36頁（伊藤房次郎著 昭和14年（昭和49年復刻）防長史料出版社）
- 注 24 元治元年か、ベアト撮影のもの。『フェリックス・ベアト写真集/幕末日本の風景と人びと』〈横浜開港資料館編 明石書店 昭和62〉122頁、『下関市史 藩制-明治前期』〈下関市役所 昭和39年〉388頁
- 注 25 『防長寺社由来』第七卷 469頁
- 注 26 『重要文化財赤間神宮文書』〈吉川弘文館 平成2年〉180頁
- 注 27 注26同書 182頁
- 注 28 西鶴の生きた時代より後世の文書ながら、文化四年五月に藩に提出された「赤間関阿弥陀寺来由覚」

(『防長寺社由来』第七巻 408～413頁)に、よくわかる形で書かれている。

注 29 <http://image.tnm.jp/HistoricalMaps/QA-4254/005.jpg> ならびに

<http://image.tnm.jp/HistoricalMaps/QA-4254/002.jpg>

西鶴より後の享保十二年の資料だが『画典通考』巻二第4丁でも同様。(以下で確認できる。

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_d0255/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_d0255/index.html))

注 30 西鶴が扱った『諸国案内旅雀』では豊前に「あゆが嶋……下ればおもかぢに白嶋二つ有」、筑前には「あゆ嶋」ありと見える。だから、西鶴が白島群島を「西間の嶋」と認識することは考えにくい。絵図類では、「海瀬舟行図」神戸市立中央図書館本には「アイ嶋」に対して筑前の「相島」、『西海路之図』には「相の嶋」に対して筑前の「相嶋」、「西海陸細見図」には「あいの嶋」に対し筑前の「あの嶋」〈ある嶋の誤〉。参考として『日本鹿子』には、長門から豊前にかけて、「○小通りヨリ○あゆ嶋へ二り○あゆが嶋ヨリ○山家のみさきへ四り」、また筑前では「○地の嶋ヨリ○あゆ嶋へ七り」とある。藍島に対し、相島を「にしのあいしま」としたと考えるのが自然である。

注 31 「北九州市の文化財を守る会会報」10〈昭和49年12月〉中村穰徳「藍島について」。また元禄十三年時点で両羽家一戸しか記録されていないことが星野久により報告されている。(「響灘島嶼の社会構造—共同体の特質とその分析」〈「社会学評論」十三-四 昭和38年〉)

